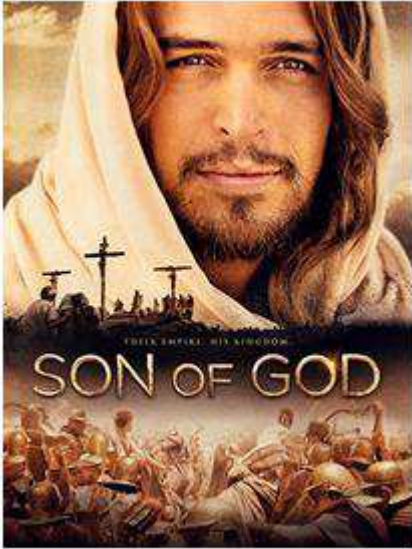


映画「サン・オブ・ゴッド」を見て



「信徒の友」誌2月号、シネマへの招待のページに「圧倒的な感動シネマが主の年2015年の年頭を飾る。」というキャッチ・コピーで、「サン・オブ・ゴッド」が紹介されていました。東京までわざわざ出かけるのだから、ついでに見ましようという事になって、いそいそと丸の内ピカデリーに出かけました。

この映画は、聖書を題材にした全10話のミニシリーズ、2013年に米ヒストリー・チャンネルで放送され、全米で反響を呼んだドラマ「ザ・バイブル」を映画化したものだそうです。イエス様役の俳優はポルトガル出身のディエゴ・モルガドという優しい表情のたくましくも美しい男性でした。旧約聖書の物語を示すファンタジックな冒頭部分がありましたが、イスラエルの乾燥した風土を思わせる雰囲気、ローマ帝国の過酷な支配を視わせる舞台設定でした。

この映画は12使徒のヨハネが長寿を得て、イエス様を回想する設定になっています。登場人物は皆、圧政に苦しみ、おどおどと人生を生きています。暴力が支配的な時代だったのでしょうか。イエス様の生涯を思えば、最初から、迫害が始まり、受難と十字架が待ち受けていますから、楽しい映画には絶対になりません。

なぜイエス様が福音宣教を始められたのかが描かれていません。預言者の言葉の成就とだけ受け止めるのでは、不思議さが最初から立ち上がります。また、数々の奇跡を映像化するのは、その意味を受け止めている人々には、深い共感を誘うものですが、ただ、見るとなれば、それはマジック・ショーのような、理解できない場面になるのです。そういう意味で映画化は難しいものだとつくづく感じました。また、私は受難、十字架の場面では正視できないため、どんなに俳優が上手でも見ません。そして埋葬になってからほっとし、復活の場面では再度緊張します。今回始めてイエス様の手のひらに丸い穴が貫通して開いているのを見て、驚くばかりでした。



ピラト役 グレグ・ヒックス

今回の映画ではイスカリオテのユダとペトロの裏切りが、他の弟子たちにも分かり、同等な重さで描かれています。それ以上に、ローマ側のピラトとユダヤ側のカイアフアの政治的駆け引き、自己保身の戦いの様子が最大の見所に思えました。総督ピラトはローマの権力を笠に着て



カイアフア役 エイドリアン・シラー

暴力的に傲慢であり、それと同時に過酷な役目を果たさなければ明日がない薄氷の上を生きているような脆さを上手に演じています。一方大祭司カイアフアは神殿の権威を疑うことなく、ユダはもちろん、一介の反逆する若者イエスも虫けらのように扱います。時にピラトを脅迫しつつ、体制維持だけを求め、宗教者としての信仰の姿は全くありません。

この両者の権力争いの中で、イエス様はボロボロ、ズタズタにされて、殺されるのです。けれども神は「なぜ私をお見捨てになるのですか」と叫ぶイエス様と共にある神であること、そして私たちも神に愛されている子であることをイエス様の生涯は示しているのです。イエス様が「神の子」と呼ばれるためには、不思議な奇跡の映像化だけではなく、神の心、即、「自分を捨てて人を愛し、人を赦し、生かす」という部分を描いて欲しいと思いました。誘惑に勝たれた姿、見捨てられた人々を求める姿を見たいと思いました。音楽はアラブ風、イスラエル風を感じ、魅力的でした。